バイトクビにされたので異世界で勇者のバイトしてくる。

ainex

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公平川　優はある日働いていたバイトをクビにされる。その帰り道に突然１人の女と出会い「勇者のバイト」を紹介され、成り行きで勇者になることになったのだが……

主にギャグっぽくたまーにシリアスな展開にします。カクヨミではこの作品をここより早く投稿しているので興味が湧いたら見てくれると嬉しいです。

目次

エピローグ　俺が勇者になった理由。 ―― 1
どうやら俺にチート的能力は存在しないようです。 ―― 7
どうやらこの世界は俺には過酷過ぎるようです。 ―― 16
勇者ランク試験 ―― 22
ゆうしゃのおしごと。 ―― 28
魔物討伐は俺にとって苦痛でしかない。前編 ―― 42

エピローグ　俺が勇者になった理由。

――――お金が無い、現代社会に生きる貧乏学生にとってこれ程の恐怖は無いだろう。世界は残酷だ、金が無ければ住むところも食べるものも無くただ野垂れ死ぬしか無いのだ、そんな状況に俺は今ある。現在俺は先程までやっていたバイトをクビにされ途方に暮れていた。

「……やばい、死ぬ、腹減った」

今にも空腹で倒れそうな時彼女は突然現れた。

「ねーねー君？　ちょっとバイトして見ニャイ？」

突然話し掛けられた俺は少しビクリとしながら恐る恐る声のした方を振り返る、するとそこには世にも珍しい容姿の女がいた。年幅は俺よりも少しうえだろうか？　彼女は亜麻色の肩の当たりまで切りそろえられた髪とそして珍しい赤色の瞳そして……頭に猫耳が生えていた。

「え、え？　誰すか？」

「もう、この際自己紹介とかは後でいいからさ！　とにかくバイト探してるんでしょ？　もし良かったら雇ってあげるよ？」

「ちなみにどんなバイトですか？」
「んま、簡単に言えば時給七千円の勇者のバイトだよ」
彼女は意味のわからない事を口にする。だが時給七千円、という言葉に負けた。
こうして俺はその意味の分からない勇者のバイトとやらを受けることにしたのだ。
×××××
そして現在俺は今意味の分からない世界にいる。と言うか異世界と言うやつだろう。
周りを見渡すと平原が広がっていた、そしてなんといっても、クソ暑い、これ軽く四十度言ってる気がするんだが？
「あ、あのー俺は何をすれば？」
「なんて事無い誰でも出来る仕事だよ？」
「あ、ホントですか。俺今極限に腹が減ってるんで出来れば肉体労働系は遠慮したいんですけど……」
あまりの空腹からかもはや腹の虫すら鳴かない。と言うか腹が痛い。
「まぁまぁ！　気にしないでチャチャッと片付けて来ちゃってよ！」
そう言うと猫耳の彼女は俺の目の前に剣を放り投げる。

「んーこれは違うかな？　んじゃこっち！　んーこれも違うなーあ、よし！　これにしよう！」

「あの、何してるんです？」

猫耳の彼女は俺の前に色んな剣を放り投げては頭を悩ませている。その際彼女の猫耳はピコピコと動いていて、とても愛らしかった。

「んー君のいた世界だとこーでぃねーと？　ってやつかな？　はいこれ！」

そう言うと彼女は俺に一振りの剣を放り投げる。俺はそれを危なげにキャッチする。

「って重!?」

彼女が俺に渡した剣は何だか不気味なオーラを放っていてなんだか気味の悪い代物だった。

「そりゃそうだよ！　君はまだ能力の解放をしてないからこっちの世界の物は重いにきまってるじゃん！」

そう言うと彼女はニヤリと笑ってから、次は鎧を俺の前に放り投げる。彼女の言う能力の解放とやらを行う前に剣と鎧の山に溺れてしまうかも知れない。

そうこうしているうちに俺のコーディネートが完成した。

「んーこれじゃあ聖なる勇者ってより魔王の手先の暗黒騎士ってかんじだね」

彼女がコーディネートした俺の姿は、剣と同様不気味なオーラを放っている漆黒の鎧

と、漆黒の剣を装備したいかにも悪役って感じの姿だった。
「それはあなたのセンスの問題じゃ……」
「よし！　次にいこっか！」
　どうやら彼女は人の話を聞かないタイプらしい。何だかこの先疲れそうだな。
「それじゃ次はお待ちかねの能力の解放だよ！　さて！　君はどんな能力を持っているのかにゃ？」
　彼女は手を曲げて胸の前で典型的な猫のポーズを取る。これが似合っているのでタチが悪い。
「てか能力の解放って何なんですか？」
「それはやって見ればわかるって！」
　そう言うと彼女は手を二回叩く、すると俺の前には何故か人生ゲームとかでよく見るルーレットが現れた。
「能力の解放はこれを回して決めるんだよ」
「そこは俺自身に秘められた能力とかであって欲しかった……」
　実の所俺は異世界物の物語を割と読むので結構秘められた能力とかに憧れていた。
「いいから早く回す！」
「は、はい！」

俺がルーレットを回すと盤はクルクルと回り始めてある文字の場所に針が止まった。そしてその文字を読み上げると……

「えと、……騎士の精神（裏）ってなんすか？」

「凄いよ！　まさかこれが当たるなんて！」

「凄いんですか？　これって」

「んーにゃ、実はそうでもない」

「何なんすか!?」

この人と話してると精神的に削られるきがするぜ、てか騎士の精神（裏）って思いっきり悪役ポジだろうが！　しかもこの姿だからもはや暗黒騎士にしかみえねーよ！

「まーまー、でもこの能力は……うん、ま！　君にピッタリ何じゃないかな？」

「何か馬鹿にされてる気が……」

「そんな訳ないにゃ！　許してにゃん！」

「か、可愛い……」

そんなこんなで俺は騎士の精神（裏）という訳の分からない能力を持って（内容は教えてくれなかった）勇者のバイトの初日が始まる。ちなみに給料は日払いらしく俺はそれを聞くとやる気が倍増した。

「ちなみに俺何すればいいんですか？」

「あーそう言えばまだ言ってなかったね、とりあえず君には勇者見習いとして研修をしてもらう事になってるから！」
「はぁ、研修ですか？」
　確かに初日のバイトって言ったら研修だよね。まぁでも給料出るからいいか。
「あ、あと言うの忘れてたけど研修中の時給は給料に含まれないから！」
「そんなブラックな!?」

どうやら俺にチート的能力は存在しないようです。

現在俺と謎の彼女（まだ名前を教えられてない）はとてもながい、ながーい道のりを一時間ほど歩いている。どうやらこの世界にも四季があるらしくその四季の中で今は丁度夏に分類される。もう一度言おう、現在俺と謎の彼女は一時間ほど長い道のりを歩いている……このクソ暑い温度の中。

「……だー暑い、暑すぎる」

「もうー情ないな？　それでもちんちん付いてるの？」

「付いてるわ！　てかなんでアンタはそんな涼しそうなんすか、こんなクソ暑いのに」

俺が今にも溶けそうになりながら歩いていると言うのに隣の彼女は何故か涼しそうな顔で歩いている。

「ん？　だって私の周りだけ氷魔法で覆ってるし？」

「なにその便利そうな魔法!?」

「あ、でも君はまだ使えないよ？　と言うか君は多分魔法を使えないと思う」

え、俺って異世界来たのに魔法使えないん？素晴らしいほどショック何ですが……

「にゃはは！　そんなに落ち込まなくても君には私がこーでぃねーとした鎧と剣がある

じゃん？」
「……その鎧と剣のお陰で動きにくいし鎧の中サウナ状態なんですけど……」
　しかもその鎧は闇のような漆黒である。そして黒は太陽の熱を集めやすいと聞く、なので現在俺の鎧の中はまさに地獄だ、そして一時間も歩くともはや体が思うように動かない。まぁ、甲冑が無いだけまだマシかも……
「うぇ、もう限界……」
　そしてとうとう限界を迎えた俺は道に大の字で倒れ込む。
「はぁ、情ない、じゃあちょっと休憩しようか？　」
　そう言うと彼女は近くの木のかげに移動してから俺にも手招きをする。
「よーし、ここで一度君のステータスを確認してみようか！」
「なんでそんなノリノリなんすか……」
「まぁまぁ、細かいことは気にしないでさ、んじゃ君私と同じように手を動かして見て？」
　そう言うと彼女は右手で印を切り始める、俺はそれを真似てみると自分の目の前にディスプレイの様なものが表示される。
「うぉ！　すげ、これ何なんすか？」
「今君の目の前にあるのが勇者専用のステータス確認様魔法陣だよ、これには自分のス

テータスとかその他諸々が書かれているからこまめにチェックしてみてね？　あ、後その君の目の前にあるだろう魔法陣は勇者にしか見えなくて、他の人には見えないから周りからは変な人に見えるよ？　」

「勇者、つらすぎるぜ……」

そして俺は評価されているステータスを確認するとそこには

平川　優　勇者（見習い）ｌｅｖｅｌ　１

攻撃２５８　　防御０　　魔力０　　俊敏９　　運―１０

スキル　騎士の精神（裏）

スキル詳細　不明

「っておい！　なんだこの脳筋ステータスは！　防御と魔力０で俊敏９ってなんだ!?　と言うか運に限ってはマイナス補正かかってんじゃねーか！」

「にゃはは！　そんなに酷いのか！　でもレベルが上がれば何とかなるから気にしなくても大丈夫だって！」

「俺勇者としてやって行ける自信ないっす……」

こうして俺の初めてのステータス確認は残念な結果に終わりました。ちなみにその後謎の彼女が魔法で呼び出したペガサス的なアレで目的地までひとっ飛びでした。

×
×
×
……最初からそれをだしてくれ。
×
×
×
×
×
×
×
「よし、んじゃとりあえずここで勇者の本分について学んできてね？　さっさと研修を終えなきゃ給料ははいらないんだから！」
「うげぇ、それを言わないでくださいよ」
　そして俺の目の前には馬鹿でかい建物がそびえ立っていた、なんと言うか白を基調とした建物でアメリカにあるなんちゃらハウス見たいな感じだ。
「んじゃ後でまた迎えに来るからちゃんと勉強するんだよー？あ、あと言い忘れていたけど私の事はテートでいいからね？」
「なんでそのタイミングで……」
　色々この人はおかしい！　会った瞬間に自己紹介するのが普通でしょうが！
「なんかタイミング逃しちゃってさ？　それで……君の名は？」
「その某映画のタイトルで俺の名前を聞かないでくれません？　俺の名前は平川　優です」
「なるほどなるほど、んじゃ君は今日からゆー君だね？」

「呼び方はテートさんに任せますよ……」
「分かったよ！　ゆーちゃん！　それじゃ後でねー」
もはやこの際君かちゃんの違いは容認することにしよう、細かいことで悩んでいたらまじで疲れそうだ……
そして俺はテートさんに手を振り建物の中に入っていく。中に入ると内装はなんというか、ゴージャス（笑）な感じでエントランスでは誰かが待っていた。
「アンタがテートのスカウトした新しい人？」
そう言う彼女は俺の格好をジロジロと見回していた。
んま、そうなるわな、いきなり鎧姿のガチガチな奴が入ってきたら。
「あ、今日から入る新しいバイトの平川　優です！　宜しくお願いします！」
「あーそう言う暑苦しいのいいから、暑苦しいのは見た目だけで十分」
地味に罵倒されているんですけど、と言うかよく見ると彼女は凄い美少女だ。俺と歳はあまり変わらないのではないだろうか、腰まで伸ばしたブロンドの髪と碧眼、そして頭の上には猫耳……なんだ、この世界は猫耳流行ってんのか？
「ジロジロ見ないでくれる？　気味が悪くて吐き気がするわ」
「そこまで言いますか……」
こうして俺は彼女に勇者の本分について教わる研修？のようなものを行うことに

なった、のだが……

「だーかーら！　勇者って言うのは適当に魔物をぶっ倒して金を稼ぐ仕事なの！　わかった？」

彼女は教えるのがめちゃくちゃ下手でした。もうなんて言うか説明の所々擬音ばかりで肝心な所が全く分からない。誰だ、コイツを任命したの、怒らないから出てきなさい。

「とりあえず金を稼げばいいってこと？」

「ただ稼ぐんじゃだめなの！　ちゃんと市民を助けて町の風紀を保ちながら……」

「あーうん、了解、とりあえずは分かった」

「アンタ絶対面倒くさくて適当に流したでしょ！」

チッ、これだから勘のいい金髪碧眼は困る。

まぁ怒ってる間猫耳がピコピコしてて可愛いっちゃ可愛いんだけどさ。

「まーまーとにかく次に進みましょーや」

「なんでアンタが仕切ってんのよ!?」

「チッ、……あーすいませんでしたー」

「今舌打ちしたし!?」

彼女は少し涙目だった。うんうん、可愛い女の子の泣き顔って何かそそるよね？　あ

れ？　俺だけ？

「とにかく！　とりあえずアンタのステータスをこの紙に書いて私に見せなさい！」

「そんな上から目線でいわれても……」

「う、うるさいわね！　さっさと書きなさい！」

俺は渋々先程見たステータスの通り紙に書いて彼女に提出した。すると彼女はまるで苦虫をかみ潰した様な顔で唸っていた。いやまぁ、そりゃそうですよね。

「アンタ……世界救う気あんの！」

「はへ？　世界を救う？　だれが？」

「あ、アンタ！　世界を救うためにテートに連れて来られたんでしょ!?」

「いや、全くそんな話聞いてまけんけども……」

「うがあぁぁぁぉぁあぁぁぁ！」

すると彼女は我慢の限界が来たのか俺のステータスが書いていた紙をくしゃくしゃしてまた開いてからビリビリにさいた。

その回りくどい破き方意味あるの？

「ふざけてんの!?」

「いえ、至極全うですけれども？」

俺は彼女のそんな問にキョトンとした顔で答える。

イヤ、だってね？　俺テートさんに世界救う云々とか全く聞いてませんですし？　タダのバイトだと聞いてましたし？

「うう、もうこの際いいわ！　とにかくアンタはこれから研修のためモンスターを倒して貰うからそのつもりで！」

そう言い残すと彼女はどこかへ言ってしまった。と思ったら急いでまた戻ってきた。

「け、研修の前にこれ飲んでおきなさい！」

すると今度こそどこかへ言ってしまった。そして俺は彼女が置いていったものを見つめる。そこには　【スキル覚醒ドリンク!!】と書かれたドリンクがあった。裏の説明を読んでみるとどうやらこれを飲んだらランダムでスキルが増えるらしい。フムフム、

ドリンクの蓋を開けて深呼吸、

「今度こそ当たり引いてやんぞ！」

そして俺はドリンクを一気に飲み干す、そして飲み終わりステータスを確認して見るとそこに増えていたスキルは

スキル　盗賊の極意

スキル詳細　稀にモンスターが何かを落とす。

「い、い、い、…………いらねぇぇぇええぇぇぇぇえええええ!!!!!」

俺の運―10の実力は伊達では無かった。

どうやらこの世界は俺には過酷過ぎるようです。

無事に新しいスキルをゲットした俺は指定された場所で金髪碧眼の美少女を待っている。待っているのだが……

「……」

何故か俺の隣には無口な女がぬぼーっとたっている。女の容姿は、銀色の髪と目の下のクマ、やや猫背気味の姿勢、あぁ、勿体ないクマが無ければ美少女なのに。そして格好はこの世界では珍しいジャージ姿、そして手には刀を持っている。

「俺平川　優って言います。もしかして君もバイト？」

「……」

さっきから俺が声をかけてもこの女は反応しない。何か怖くね……

そうこうしているうちに残念金髪碧眼のお出ましのようだ。

「はい、んじゃこれから実践をしてもらうわ！　そこの見習い勇者二名、私が配布したドリンクは飲んだかしら？」

あ、この女もやっぱり勇者なんだ、何かすげぇー場違いじゃね？　いやまぁ、俺も人のこと言えた義理じゃないんだけどさ。

「飲みましたー」
「……コクリ」
「何なのアンタら、やる気がこれっぽっちも感じないんですけど……」
何を今更、元から俺は金が欲しいがために始めたわけであって魔王討伐なんてこれっぽっちもやる気ないですよ。
「まぁいいわ！　それじゃ解放した新しいスキルを教えてちょうだい？」
そう言うと彼女は俺たち二人に紙とペンを渡した。口頭じゃダメなルールでもあんのかな？
そして俺達は紙にスキルを書いて彼女に渡した。すると彼女は紙を見るなりワナワナと震え始めた。
「なんでアンタはあの高価なドリンクでヘボイスキルしかでないのよ！」
「知らねーよ！　俺だって好きで盗賊の極意とかいうスキルゲットしたわけじゃねーよ！」
「飛んだ悪運ね……」
「余計なお世話だ！」
「それとそこの女！　仮にも勇者なのになんでこの暗殺者の心得なんて悪役ポジなのよ！」

あ、君も外れ引いたんだ、あのドリンク使えねーな。
「もういいー！　とにかく実践よ！　」
こうして初めからドタバタな展開であったがようやく実践をする事になった。
「あ、それと私の事はレクト教官でいいわ」
「なんであんたら最初から自己紹介しないんだ！」
×××××
×××××
「はいそれじゃ剣を抜いて構えなさい？」
そう言われて俺は剣を抜く。そして俺の目の前にいるのは、スライム、うんとりあえずスライムです。形は想像にお任せしますとも。
「はい、それじゃ適当にズバァーッと倒しちゃって」
「説明が適当すぎるぜ……ってあれ？」
俺がスライムを倒すべくスライムに視線を移すとそこには何もいなかった。
「……」
「すいませーん、スライムどこにもいないんすけどー」
「え!?　あ、じゃあまたさがすわよ！」

俺は隣の女に視線を移す、だが女は以前ぬぼーっとした表情から変わっていない。もしかして……いや、ないか。
「それじゃ今度こそ始めるわ、さぁ剣をぬいて……」
「教官ー……」
「わ、わかってるわよ！　次よ！」
「……」
それから数回繰り返しても俺がスライムを討伐する事はなかった。
「おい！　さっきからスライム全然倒せねーんですけど！」
「わ、私に言わないでよ！」
「使えない金髪碧眼だな!?」
「その呼び方辞めてくんない!?」
「……」
「おい！　お前も何かいってやれ、よ？　ひぃぃ！」
「何怯えてんのよ、ひぃぃぃぃぃ!!」
俺とレクト教官（笑）がなぜ怯えたのか、それは
「ウヘヘ、エヘヘヘヘヘヘヘヘ!?!?」
先程まで無口だった女が突然気味の悪い笑い声を上げたからだ、あ、モンスターの鳴

き声じゃないよ？

「あ、アンタ！　さっさとソイツを落ち着かせなさい！　仮にも同僚でしょ！」

「む、無茶言うなよ！　同僚って言っても言葉交わしたこと一回も無いんだぞ！」

「ウへへへへへへへへ!?!?」

「「とりあえず落ち着けぇぇい!!」」

結局彼女を、落ち着かせることが出来たのはそれから数分後だった。

「……という訳なんです」

それから俺達は無口な女の話を聞くとどうやら彼女は極度のあがり症らしく一度あがってしまうと記憶が無くなる、との事だった。ちなみにスライムを瞬殺したのも狂戦士化した彼女のせいだったようだ。

「おいおい、こんな危なっかしい勇者聞いたこと無いぞ……」

「私だって今まで結構勇者見てきたけどこんなヤツ初めてよ！　アンタも含めてね！」

えー、そこに俺入るんすか？　そこのあがり症という名の皮を被ったバーサーカーに比べたら幾分かましな気がするんですけど……。

「と！　に！　か！　く！　ここで研修は一応終わりにするから、後は勇者ランク試験を終えて今日は解散！」

「勇者ランク試験？」

「あーそう言えばアンタにはまだ言ってなかったわね、簡単に言うと勇者にはＡからＧまでランクがあってそれをちょっとした実技試験でランク付けするのが勇者ランク試験よ」
「ふーん、レクト教官（笑）にしてはわかりやすい説明ですね」
「……同意」
「あ、アンタらねぇ……」
　まぁこうして研修は終わったのだが次は勇者ランク試験というものらしい。試験の内容は訓練用の魔物を討伐する、というものらしくレクト教官によると初心者でも簡単に倒せる雑魚い魔物らしいので俺と狂戦士はレクト教官に連れられて試験会場へと向うのであった。
「……そう言えば私の名前、市ノ瀬　蘭。よろしく」
　もはや何も言うまい、疲れるだけだ。

勇者ランク試験

「ついたわ！　ここが試験を行う会場よ！」

そう言う金髪碧眼のレクト教官はでかい建物を指さして言う。建物の外観は……そのなんて言うか、ローマっぽい奴。うん、そんな感じ。てかこの世界全体的にパクリ建造物多くね？　俺の気の所為？

「なによ、そのなんとも言えない様な目は！」

真の達人は目だけで伝えたい事を伝えるという。俺はそれにトライするためにレクト教官に暑い視線を送る。

「な、なによ！」

「まぁまぁ、とにかくさっさと終わらせよーぜ、蘭だってそう言ってるし」

どうやら達人への道はまだまだ険しいようだ。

「……コクリ」

「アンタらいつの間に意気投合したの!?」

意気投合したのではない、ただ何となく仲良くした方が今後の為にいいと判断して妥協したんですー。勘違いしないで下さい、こんな人と意気投合したら俺も狂戦士になっ

ちゃうから。

まぁ、兎にも角にも謎の勇者ランク試験が幕を開けるのであるが……まさかあんな事になるとは……

×××××××××

「うがぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「ちょっとタンマ！　これ試験用の魔物だよね!?」

「アンタ早く逃げて！　ソイツは試験用じゃなくて本物よ！　なんの手違いか分かんないけど本物の魔物が入り込んだみたい！」

「ふざけんな！　死ぬって!?」

現在俺は何らかの手違いによって本来試験用の雑魚い魔物と戦うはずが二足歩行の牛みたいな奴から逃げ回っている。二足歩行の牛（以後ミノタウロス）は俺の身長と体格の二倍くらいあって全く持って勝てる気がしない。あ、俺死んだな。

「ちょっ待ってて！　今そっちに行くから！」

「早く来てくれ！　まじでご臨終のお陀仏になっちゃうから！」

多分跡形も残らずミノタウロスの排泄物になっちゃうから！　ん？　ちょっと言っ

てる意味わかんない。
「とりあえず落ち着いて対象しなさい！」
「無茶言うな!?」
　しかし、とりあえず逃げ回っているだけでは拉致が開かないので俺はテートさんから授かった漆黒の剣を構えミノタウロスに立ち向かう。
「がァァァァァァ！」
　前言撤回、逃げなきゃ死ぬ。
「ウワァァァあああ！　あ、イテッ！　」
　なんということでしょう、俺はミノタウロスから逃げる途中で転んでしまいました。サヨウナラ異世界、サヨウナラお母さんお父さん、サヨウナラ現世！　生まれ変わったら本当の超絶イケメン勇者にしてください！
「童貞のまま死にたくねぇーよ！」
　そうしてミノタウロスは俺にゆっくりと近づいてくる。まるでミノタウロスが「お前はもう、死んでいる」とでも言っているかのようだ。いや、言ってないんだけどさ。
　そして俺がミノタウロスの強靭な拳に押し潰される瞬間、何者かがミノタウロスの両腕を切り落とす。
「……それが遺言にならなくて良かったね」

途端視界に映るは銀色の髪とジャージ姿。
「ら、蘭さん!?」
なんと俺を助けてくれたのは先程まで全く気配を感じなかった狂戦士蘭さんでした！
「ありがとうございます蘭さん！　さっきまで人知れず馬鹿にしてた俺をお許し下さい！」
「……気にしないで、私はしたい事をしてるだけだから」
そう言うと蘭は俺に親指を立ててキメ顔でスマイル。やべ、不覚にもドキッとしてしまった。蘭にときめくとか俺病気かもしれん。
その後の蘭とミノタウロスの戦いは一方的な物になった。ミノタウロスは両腕を切り落とされたまま何も出来ず、次は両足を切り落とされた。さっきまで凶暴だったミノタウロスは、蘭の手によって可愛い可愛いミノタウロス達磨に変貌を遂げた。ミノタウロス達磨、お一つ五百円デース。
「大丈夫!?　安心しなさい！　この私が来たからにはあんなクソ牛なんて一発、で……何が起きたの」
おっと、来るのがおそすぎでっせ？　レクト教官。
「アンタが来る前に救世主蘭さんがミノタウロスを倒してくれました」

俺がドヤ顔で蘭を指さすと、蘭は案の定興奮状態で気味の悪い笑い声を上げていました。
「ウヘヘヘヘヘヘヘヘヘ!?!?」
「やばい!?　早く落ち着かせないと！」
その後蘭を何とか落ち着かせ、俺と蘭はレクト教官に案内された個室に移動する事になった。
「よし、それじゃあこれから見習い勇者二名の勇者ランクを発表するわ！」
「「おー」」
パチパチとやる気のない拍手と共に発表された俺達のランク、それは例のように紙に記されて配られた。口頭で言えば良かろうに……
平川　優　勇者ランクG
時給七千円勇者
うん、なんて言うか、そうだろうと思ったぜ……
そして隣の蘭の紙を見るとそこには、
市ノ瀬　蘭　勇者ランクB
時給一万五千円勇者
「嘘、だろ」

こんなにも差が出るものなのか……

「アンタも蘭を見習って勇者ランク上げなさい？」

「時給一万五千円、だと？」

「そっち!?」

こうして俺の勇者のバイト初日が終了したのである。

ゆうしゃのおしごと。

ミノタウロス事件から数日後、俺は無事に見習い勇者から卒業し、本格的に勇者のバイトを始めることになった。そして幸か不幸か運命か、俺のパートナーとして何故か市ノ瀬　蘭が任命された、と言うか押し付けられた。

「おー、ゆー君何だか久しぶりだね？　」

「こんちゃーす、テートさん」

俺の目の前にはもはや俺の中で人気急上昇中の猫耳アイドル（俺調べ）、テートさんだ。

「もう！　普通に呼び捨てで構わないって！」

「あ、そすか、りょーかーい」

「切り替え早いね……」

何だか当たり前のようにテートさんと話してるけどこれって前の俺にしては凄いことだぞ、非モテ童貞で中肉中背の冴えない苦学生だったあの頃の俺、案ずるな、こちらはしっかりとやっておる。すぐにお前もこちら側になれるぞ！

「所でなんだけどさ……さっきからゆー君の後ろでずっと私のこと睨んでる人がいるん

けど……」

そう言いながらテートさんはあとずさる。むむ、誰だ？　俺のテートさんにそんな失礼な事するヤツ、あぁお前ね……

「あーコイツの事は気にしないで下さい。コイツ初対面の女の人には必ず睨むんですよ、何でなんすかね？」

「……平川君、この女、誰？」

「そう言えば紹介するの忘れてたな」

俺は蘭にテートさんを簡単に説明する。すると蘭は一層テートさんを強く睨み始めた。

心なしかさっきからテートさんの猫耳が垂れているようなきがするんだけども……

「と、とりあえず！　今日から初めて本格的な勇者のバイトを始めるわけだけども、何か質問あるかね？」

ピコン！　と立ち上がるテートさんの猫耳。

うんうん、やっぱりテートさんはいつも通り可愛いぜ……

「……あの女、後で殺す」

俺の耳元で囁かれた声を俺は聞こえないふりをした、と言うか蘭さんが怖いんですけども……

×××××××

現在俺と蘭は初任務をこなすためにテートさんに紹介された家の正面にいる。さて、何故仮にも勇者である俺達が魔物の住むダンジョンでは無く、全く勇者に関係の無さそうな家の正面にいるのか……それは

「何で勇者の初任務が引きこもりを治す手伝いなんだ？」

「……そんなこと私にきかれても」

「デスヨネー」

何故だが分からないが勇者が引きこもり更生を手助けする、と言う意味のわからない任務を任されたからだ。

しかしこんな所で突っ立っていても拉致が開かないので早速家の扉をノックする。すると中から出てきたのはまだ十歳ぐらいの女の子だった。

「あー！　やっときてくれたー！　ささ、中に入って入って！」

うんうん、年相応の元気の良さだ、やはり子供はこうでなくては。

しかし中に入ると女の子の元気のいい声とは全く逆の雰囲気でなんともドヨーンとした空気の佇む室内だった。しかしそれは室内だけではないらしく心なしか先程まで

元気だった女の子の顔も何だか元気が無くなっている。
「……何だか空気が悪いわ、嫌な気配がする」
「それについては同感だ、しかし存在そのものが空気の悪い原因のお前が言うと何だか新鮮だな？」
「……流石の平川君でもその言葉は許し難い」
俺は蘭の言葉を華麗にスルーして女の子から事情を聞くためにリビングに通してもらう。
そして事情を簡潔に言うと、ある日女の子のお兄ちゃんが学校から帰ってくるとただいまも言わずに部屋に入ってそれっきり出てこなくなった、以上。
「……簡潔すぎて問題が小さく見えるわね」
「人の心を勝手に読むんじゃない！」
「……そう言えば言ってなかったけど、私が一番最初に手に入れたスキルは読心術よ」
「すぐにパートナーの変更を申請する！」
パートナーが読心術持ってるって俺嫌なんですけど!?俺の心の中丸見えってメチャクチャ嫌なんですけど!?俺結構心の声多いからそれも全部聞こえちゃってるって嫌なんですけど!?
「……気にしないで、このスキル、オンオフが可能だから」

「すげぇ無駄なところで便利だな……」
勿論その後蘭の読心術はオフにしてもらいました、ステータス見せて貰ったから嘘はついてないと思います。
「という訳で、引きこもりのお兄ちゃんを外に連れ出そう作戦開始！」
×……おー」
×××××なんだこのテンションの差は……
×作戦概要
その一、まずはこの家の空気の悪さを改善しましょう。
その二、無事に空気の浄化を成功したらお兄ちゃんを外に連れ出しましょう。
その三、晴れて初任務達成、テートさんに報告後、日払いの給料貰ってバイト終了。
「てなわけで、まず空気の入れ替えだ、家中の窓を開け放て！　そして悪しきオーラをこの家から退散させるのだ！」
「……りょ」
やる気のない了解と共に俺と蘭は家中を走り回り無事に窓を全て開け放った、のだ

が、一時間ほど経ってもまるでこの家の空気の悪さは改善されることは無かった。
「何故だ、何故空気が変わらないんだ……」
「……まず根本的な問題だと思うけど」
「ほほう、聞かせてもらおう」
「……多分この空気の悪さは魔物が関係していると思う、空気中に僅かに魔物の気配が感じられる」
「一体お前何者なんだ……」
蘭さんってば何でもできちゃうじゃね？　もはや俺いらなくね？　俺に蘭が押し付けられたんじゃなくて、蘭に俺が押し付けられたんじゃね？
「……とにかく、まずは魔物の居場所を突き止めないと問題の解決には至らない」
「成程、んで、魔物の居場所はどうやって突き止める？　手当たり次第に家中探してみるか？　でも俺達窓を開ける時に家中の大体の場所には行ったぞ？」
「……いや、まだ行ってない場所が二つある、一つは屋根裏部屋、そして二つ目は……」
「問題のお兄ちゃん部屋、か」
「……正解、多分その部屋が一番可能性が高い」
「でもよ、結局お兄ちゃんが部屋から出てこないのが原因なのにどうやって肝心の部屋に入り込むんだ？」

この悪い空気の原因がお兄ちゃんの部屋にあると言っても要は入らなければ意味が無いのだ。
「……それについては問題ない、既に部屋の鍵は合成済み」
「お前もはや完璧悪役だよ！」
シャキーンという擬音が付きそうな感じで鍵を取り出す蘭さん、アンタその内捕まるよ、いや、異世界に警察はいないから別に大丈夫か。
ってな理由で、ｗｉｔｈお兄ちゃんの部屋の扉の前。
「……それじゃぁ部屋を開ける」
蘭が合成した鍵を部屋の鍵穴に差し込むとすんなりと入り無事に鍵は外れた。いや、何か分かんないけど罪悪感がぱないんすけど？俺達ってホントに勇者何すよね？
「し、失礼しまーす」
恐る恐る部屋に入るとまだ昼間と言うのに部屋の中は真っ暗だった、だがただならぬ空気がこの部屋だけは一層強いと言うことは分かる。間違いなく元凶はこの部屋だろう。
「……精霊術式Ｎｏ．１２ライト」
蘭がそう唱えると右手から不思議な光が生み出され先程まで真っ暗だった部屋が瞬く間に照らし出される。

「おい！　お前魔法使えんのかよ！　俺にも教えろよ！」
「……そんな事よりも、前」
「おふぅ、これはやばそうだな……」
　変な声と共に蘭が指を指すその先には、まるで生気が感じられない人間がイスにぐたりと座っていた。女の子の言葉が本当ならアレがお兄ちゃんなのだろう。
「おい、どうするんだ？」
「……ここは平川君の番だよ」
「はへ？　俺にどうしろと？」
「その暑苦しい黒い鎧、多分悪い気を吸い込んで自分の力にする能力がある、だから来ている平川君と近くにいる私にはこの部屋の空気の影響を受けない。多分それ以外の人が入ったらあそこの人みたいになる」
　ほほう、この鎧にそんな力があったなんて初めて聞いたな。
「てか何でお前が俺の鎧の事知ってるんだ？」
「……企業秘密」
　そこはしっかりと答えろよ！　何かこの子俺の個人情報全部握ってそうなんだが!?
「……とにかく、その鎧の効果を使ってあの人に取り付いている魔物を弱らせる、そして充分弱らせたら私のこの刀で斬る」

「なるほどね、っておぉい!!　お兄ちゃんごと真っ二つだろうが！」
「……その点については心配要らない、私のこの霧ヶ峰は自分で認識したものだけを切り裂く優れもの」
「何かメチャクチャ涼しそうな名前だな」
　今にも頭のなかできりが～みね♪ってメロディーが流れそうだよ。
　それにしても蘭の持ってる刀ってそう言う能力なのか、なんかすげぇチート武器だな。
「んで、俺は結局どうすればいいんだ？　……まさか抱きつけとか言わないよな？」
「……まさか、そんなうらや、ごほん、そこまでしなくていい、近づくだけで充分効果はあると思うから」
「この際何を言おうとしたのかは触れないで置く、んじゃボチボチ行ってくるか」
　そう言ってから俺は問題のお兄ちゃんに近づく、物凄く気味が悪い、全く動いてないし、実は死んでんじゃね？　それでバイ○ハザー○見たく突然襲いかかってくるぱたーんじゃね？
「……平川君、心の声がうるさい」
「っておい！　さっきオフにしたんじゃねーのか！」
「……」

「そこは無視なのね……」
それから俺がお兄ちゃんの近くにいると本当に鎧が悪い空気を吸い取っているらしく身体に力が湧いてくる。なんだか今ならミノタウロスにも勝てそうな気分。いや、辞めておこう変なフラグ立てると後々怖そうだし。
「……もう充分、離れて」
「あいよ」
そして俺が離れると蘭は霧ヶ峰を手に居合の構えをする。すげ、何か凄い様になってるぞ。
「……セィ!」
そんな蘭の掛け声も共に放たれた霧ヶ峰の任意斬撃は本当にお兄ちゃん本体は斬らず取り付いていた魔物だけを切り落とした。
蘭先輩かっけーす。
「……多分これで大丈夫だと思う」
「だといんだけどな?」
「……どうして?」
「いや、何かこの部屋の空気の悪さに比べて対処がすこぶる簡単すぎねーかなと思ってな? 」

何だか変な気がする。こんな大規模な事する魔物がこの程度で収まるのだろうか？
もしも俺がこの魔物だったらこれを囮にして……
「あはは！　勇者さん達本当にお兄ちゃんを助けてくれたんだね？」
「なんだ、さっきの女の子か、もう大丈夫だ！　お兄ちゃんは助けたぞ！」
「本当に助かってると思ってるの？」
「ん？　なにをいってんだ？　この通りきっちりと……」
「……平川君、その子から離れて」
「だってそのお兄ちゃん、もう死んでるんだよ？」
途端に女の子の姿が変貌する。口からは牙が二本生え、血色の悪い顔、そして、気味の悪い赤色の瞳。
「……吸血鬼」
「は？　なんでこんな所に吸血鬼なんているんだよ！」
「勇者さん達、丁度いいや、そこのお兄ちゃんの血がもう無くなってさ？　だから、勇者さん達の血を頂戴？」
そういう事か、お兄ちゃんが引きこもりになった何てはなから嘘で、実際はお兄ちゃんの血を吸っていたってことか。
「あー畜生、嵌められた……でもよ、相手が悪かったな吸血鬼、何たってこっちには！」

「……ごめん平川君、さっきの斬撃で力は使い果たした、後は任せる」
「こっちには、なに？」
「や、ヤバイヤバイヤバイヤバイ!!」
　蘭が戦えなかったら負け格じゃねーか！俺は戦いに関しては素人以下なんだぞ！
「蘭！　しっかりしてくれ！　俺は戦えねーぞ！」
「……大丈夫、よ。その、け、んがあれ、ば……」
「っておい！　こんな時に気絶してんじゃねー！」
「はぁ、全く女の子に頼る男って男としてどうなんです？」
「う、うるせ！　人には向き不向きってもんがあるんだよ！」
「生憎、私は人間ではなく、吸血鬼なのでその言葉は理解できないです、それじゃ、覚悟して下さいね？」
　そう言いながら舌なめずりをする吸血鬼は今にも襲いかかってくる態勢だ、やっぱり俺って勇者に向いてないかも……
　そして吸血鬼が噛み付くその瞬間、強い光が俺の視界を覆う。そして目の前にいたのは……
「大丈夫!?　二人共！」
　焦っているのか猫耳が左右にピコピコ動いているテートさんだった。

「は、はは、たすか、った……」

そして俺はテートさんを見て安堵したのか、意識を失った。

×××××××

そして俺が目を開けると目の前には見慣れた目の下のクマと焦点のあってない瞳、珍しい銀色の髪が特徴的な蘭の姿があった。そして後頭部に柔らかい感触、どうやら俺は蘭に膝枕されているらしかった。

「……具合はどう？」

「んーまだちょっとボーッとするだけ、後はなんとも無い、かな？」

「……そう、なら良かった」

そう言いながら蘭は俺に微笑む。

初めて見た蘭の笑った顔は本当に可愛くて思わず惚れてしまいそうだった。

それからテートさんに事情を話して給料を貰いました。どうやら結構時間が立っていたらしく合計で五時間働いて給料が三万五千円でした。命を失いかけてこの額とはなんとも割に合わないと思った俺であった。

ちなみに蘭の時給は一万五千円なので給料は七万五千円です。泣きたい……

という訳で、今回のバイト、終了。

魔物討伐は俺にとって苦痛でしかない。前編

俺はどうしてもあの瞬間を忘れる事が出来ずにいた。口元から見える二本の牙、そして血色の悪い顔色、そしてまるで吸い込まれる様に綺麗な赤色の瞳。あの目に見つめられていると何だか段々と自分が自分じゃ無くなっていくような気がするのだ。

「……まだ昨日のこと引きずってる？」

そう蘭が俺に心配そうに問いかける。

「あぁ、でももう大丈夫だ。心配しなくていいよ」

「……そう、なら良かった」

蘭が俺に微笑む、何故か蘭が笑うと最近ドキッとしてしまうのは何故だろうか？

「……さっきから心の声うるさい」

そう、蘭は読心術のスキルを持っていて人の心を読み取ることが出来……っておい!?

「お前！　また俺の心の声を勝手によんだな！　折角シリアスな気分になってたのに台

無しじゃねーか！」

「……平川君にシリアスは似合わない」

おう……さらりと傷つくこと言ってくれるじゃねーか。確かに似合わんけど！　似合わないけど！

「……ちなみに今日の依頼は魔物討伐だからようやく勇者っぽいこと出来るよ」

「え！　まじで？　ってさっさと読心術オフにせんか！」

この子まじで何考えてるか分かんないんだけど!?　でも笑顔は相変わらず可愛い。

「……それはきっと、恋」

「いいから読心術オフにしろ」

はい、俺にシリアスな展開は向いてないようです。勉強になりました。ってな理由で今日のバイト、開始ー

×××××

×現在俺は魔物討伐のためになんか全体的に白い建物（以後ホワイトハウス）がある町からほど近い森の中にいる。

「んで、今日はテートさんも一緒なんすか？」

「そりゃねぇ？　昨日の事もあるから心配でさ？」
今回の任務は俺と蘭の他にテートさんも同行するようだ、いやー任務中もテートさんの猫耳を見れるとは、このバイト最高！
「あ、猫耳っていえば最近テートさんにゃんとか言わなく無いすか？」
どうしたんだろ？　俺結構気に入ってたのに。
「あーあれね、飽きた」
「そんな理由で!?」
「……平川君、さっきからその女と話すぎ」
「別にいいだろ、お前には関係ない」
俺は素っ気なく蘭にそう言うと二人は何か言いたげな顔で俺を見つめる。
「……むー」
「ゆー君……」
その後何故か俺は女子二人からめっちゃ睨まれました。
「はい、これで五頭目だね」
バタりと倒れていく毛むくじゃらの獣、見た目からしてオーク見たいなものだと推定。尚、俺は戦闘をテートさんと蘭に丸投げしております。やる気ない？　いいえ、適

材適所ってやつです、言い訳ですね、はい。
「お疲れ様ー、俺の出番無いっすね」
オークを狩り終わった二人を労う為に俺は二人に近づく。
「いやいや、ゆー君がやる気ないだけだよね？」
「何を言いますか、俺は効率的な判断をしただけですとも」
決してやる気がないわけではない！
「……大丈夫、平川君は私が養うから」
「よっしゃ！　働くか！　次の獲物はどいつだ！」
女の子に養われるほどまだ俺は腐っていない！
そんな茶番の後、全く魔物と遭遇せずに森の中を散策しているといきなりテートさんが足を止める。
「何か大きな魔力を感じる、ちょっと二人共、そこで待ってて！」
そう言い残すとテートさんは俺達を置いてどこかへ走り去ってしまった。
「どうしたんだろテートさん、すげぇ焦ってたみたいだけど……」
「……恐らく平川君には感じないと思うけど、この周辺昨日の吸血鬼と同じ匂いがする」
「吸血鬼って、この辺りにいるってことか⁉　だったらテートさんが危ないじゃないか！」

俺はテートさんを追うために一人で走り出した。そのために蘭が直後に発した言葉を俺は聞き逃してしまった。

「……多分、彼女も……」

×××××

×××

それから俺は森の中を走り回った。しかし闇雲に走り回っても見つかるはずもなく結局俺はこの広い森の中で迷子になってしまった。

「これ、やばくね、勢いで飛び出して蘭置いて来ちゃったし、テートさんも見つからんし」

「……私ならここにいる」

「おうわ!?　いつからそこに!」

変な叫び声をと共に後ろを振り返るとそこには俺を探し回ってせいか少々呼吸が荒い蘭の姿があった。

「と言うか、お前ってたまにいきなり出て来るよな?　その変どうなの?」

蘭は結構いきなり出てくることが多い、例のミノタウロス件がそうだ。俺がミノタウロスの拳に押し潰される直前何処からとも無く蘭が現れたりした事がある。その他に、スライム虐殺事件とか、エトセラ……

コイツ影薄い訳じゃないしな、てか割と存在感ある方だと思うんだが……

「……平川君は私のスキル知ってるでしょ？」

「勿論、あの犯罪臭ぷんぷんする読心術ってスキル……」

「……その他にもう一つある」

「ってあれか、あの胡散臭いドリンク飲んでゲットしたスキル」

記憶に新しいスキルドリンク、あれで手に入った俺のスキルまじで使えないんだよな……

「……そう、暗殺者の心得、このスキルは身体能力の強化と対象の追跡、そして……気配を消す」

「おいおい、何気そのスキル万能じゃねーか、俺のスキルと交換してくれよ」

「……拒否する、それに平川君の騎士の精神（裏）の方が私のスキルより万能だよ？」

何を言うか、俺がこのスキル当ててから一度も使用した事ないんだぞ？

「嘘つけ、いまだに俺このスキル使ったことないし、詳細も不明だぞ？」

自分のスキルなのに詳細が不明ってくそスキルにも程があると思います、誰このスキル作った人、怒らないから出てきなさい、って何かデジャブ。

そんな俺の言葉を蘭は華麗に無視する。

「……それよりもまずはあの女を探さないと」

「あ、そうだった、それじゃあお前のスキルで追跡頼むぞ？」
蘭の追跡スキルがあればテートさんの場所もすぐ割れるだろう。あぁ、もっと早く蘭に相談すれば良かった。
しかし蘭は都合が悪そうに視線を逸らす。
「……それは無理、あの女私の追跡を跳ね返したから」
「そ、それじゃあどうやって……」
「……心配要らない、これ、見て」
そう言うと蘭は地面を指さす、そこには血の後がありまだ新しい、そしてその血の後はどこかへ続いていた。
「……この血から感じる魔力、多分あの女のもの、これを辿っていけば見つかるはず」
「この血って、テートさん怪我してるってことじゃねーか！　尚更早く見つけないと！」
最悪の場合も考えられる。一刻も早くテートさんを見つけ出さなければ。
「……平川君は心配性、あの女、この程度じゃ死なないから」
「お、おい、それってどう言う……」
意味だ？　と言い切る前に蘭は血のあとを辿り始める、俺は若干モヤモヤしながら蘭の後を追うことにした。
そして血の後を辿っていくとその先には洞窟があった。そして血の後は洞窟の奥ま

で続いているようだった。
「……多分この奥にあの女がいる」
「何で洞窟何かに……」
この洞窟の中にテートさんを焦らせる程の理由があるのか？　とてもそうだとは思えないが……
「……どうする？　中に入るかは平川君に任せるけど」
蘭がそんな事を聞いてくる。何を言うか、
「入るに決まってる！　テートさんを助けなきゃな！」
俺は洞窟の雰囲気に若干身震いしながらも洞窟の入口の前に立つ。
「……多分入っても助けるどころか、足でまといだと思うけど……」
「余計なお世話じゃい！」
そんなの俺が一番理解してるっての！
洞窟の中に入ると外の気温からは想像出来ないほどひんやりとしていて昨日の嫌な空気とは別の重苦しい雰囲気が俺と蘭に襲いかかって来た。尚、洞窟の中は当然暗闇で、洞窟の中は蘭の魔法で生み出した光のみが光源となっている。
「と言うか洞窟って言ったら魔物って感じだけど今の所一体も遭遇してないぞ？」
普通に魔物との戦闘を仮定して気合いを入れてきたのにな。どうかしたのだろうか

？

「……その洞窟＝魔物って想像よりダンジョン＝魔物の方が正しいと思う。まずここ、普通の魔物は入れないと思う」

「え、それってどう言うこと？」

「……入口に変な結界が貼られていた。多分入れるのは私達勇者と……吸血鬼だけ」

蘭がそう言い終わると目の前には倒れこんでいるテートさんがいた。

「テートさん！　どうし、たん……え？」

俺がテートさんの元に駆け寄るとさっきまで蘭の魔法の頼りない光でぼんやりとしか見えなかったテートさんの姿に変化がある事に気がつく。テートさんの容姿は先程とは別のものに変わっていて、口元からは二本の牙が生え、顔色が少し悪い、そして初めてあった時に見た吸い込まれるよな赤色の瞳、その姿は……正真正銘吸血鬼の姿だった。